

豊田資料館 郷土資り

No. 79

Toyota City Museum
Of
Local History

目次

- ・市制 60 周年記念事業 民俗芸能大会「農村歌舞伎公演」を終えて 2
- ・平成 23 年度 豊田市近代の産業とくらし発見館企画展 白瀬^{のぶ}瀧～夢の南極大陸へ～ 3
- ・民具調査だより -6 トクさの籠・漆喰彫刻 4 態 4
- ・郷土学習スクールサポート事業 恵まれた時代に生きるみなさんへー小原中部小学校との連携ー 6
- ・埋蔵文化財調査ニュース 7
- ・文化財シリーズ 79 市指定文化財 隣松寺本堂 8
- ・資料館 NEWS 8



市制60周年記念事業 民俗芸能大会 「農村歌舞伎公演」を終えて

平成23年12月11日(日)に小原交流館で市制60周年記念事業民俗芸能大会「農村歌舞伎公演」を開催しました。市内で農村歌舞伎を伝承する旭歌舞伎保存会、石野歌舞伎保存会、小原歌舞伎保存会、藤岡歌舞伎の4団体による合同公演は、平成19年に石野の岩倉神社農村舞台で開催して以来となります。小原交流館のホール「ザ・小原座」での合同公演は初めての試みであったため、4つの歌舞伎団体で構成される農村歌舞伎連絡協議会・文化財課で、6月から12月にかけて10回以上にわたり、入念に話し合いを重ねました。公演の開催準備に携わり、練習、リハーサル、のぼり立て、小道具や舞台組み、衣裳や化粧など、本当に多くの人が関わって農村歌舞伎が行われているのだということを実感しました。

そうして迎えた本番の日！当日は、300席のホールに、延べ観覧者数が約700人という満員御礼の盛況でした。一幕目の石野子ども歌舞伎の「白浪五人男しらなみごにんおとこ 稲瀬川勢揃いの場いなせがわせいぞろい」では、子ども達一人一人の個性が光る名乗りにおひねりが次々と宙を舞い、二幕目の旭歌舞伎の「二月堂春日の由来 良弁杉かすが しょうべんすぎ」ではなんと90歳の役者の方が良弁上人のお母さん役を演じ、良弁上人との感動の再会に、お客さんは涙していました。三幕目の石野歌舞伎「義経千本桜吉野山初音の旅 道行よしつねせんぼんぎくらのやまはつね みちゆきの段」では、狐の佐藤忠信という男前の役を中学生の女の子が演じていたのですが、とてもとても格好よく、静御前との幻想的な道行で観客を魅了しました。

四幕目の藤岡歌舞伎「一谷嫩軍記 熊谷陣屋いちのたにふたばぐんき くまがいじんや」での息子を亡くした相模の泣きの場面では、相模の悲痛な思いが伝わってきました。また小原歌舞伎の「奥州安達ヶ原三段目 袖萩祭文おうしゅう あだちがはらさんだんめ そではぎさいもんの場」は、最後を飾るのにふさわしい貫禄の演技でした。幕間には、保存会の方が幕や農村歌舞伎の解説をしてくださいました。



「付け打ち」という裏方の衣裳で解説を行う藤岡歌舞伎の会長の太田さん(右)と司会のエフエムとよたの甲田さん(左)。見得や立廻りなどの役者のここぞという場面で、つけ板を拍子木で打って音をつけます。

ロビーでは村国座舞台画工である野村龍峯さんが、来場者の名前を歌舞伎文字の勘亭流(今回のタイト

ルに使用している書体)で書くというパフォーマンスが大人気でした。

野村さんは、会場入口の上に掲げられた上演演目の題字も勘亭流で書いてくださり、公演に花を添えてくださいました。小原商工会女性部・小原グリーンツーリズムさんの御協力による押し寿司・味ご飯の販売も大好評でした。



農村歌舞伎の魅力は、いつものあの人が舞台の上では別人となる変身の不思議さにもあるのではないかと思います。化粧をして舞台に立つとガラリと人が変わり、観ている人たちを歌舞伎の世界の中に引き込んでしまう力があるのです。一種のイリュージョンのようです。農村歌舞伎では、役者も裏方を行い、裏方が役者にもなります。全部自分達で作り上げているのです。幕の裏側では、化粧をして衣裳を着た役者さんがトンカンと舞台を組んでいることにも驚きました。

役者が足りないということで、急遽歌舞伎の特別展を担当した文化財課の若手男性職員2名も義経の家来役、軍兵役として2幕、出演させていただきました。練習に参加したり、実際の公演に出演して、農村歌舞伎を身をもって体験することができた貴重な機会になったようでした。

旧市内の観客の方も多く、これまであまり触れる機会のない農村歌舞伎という地域の伝統文化に触れてもらったのではないのでしょうか。

こうした公演を通じて、農村歌舞伎に参加する人の輪がもっともっと広まればと思っています。

(不破 恵理)



白瀬 轟 ～夢の南極大陸へ～

現在、南極観測船 新「しらせ」が就航し、再び南極に関心が高まっていますが、今からちょうど100年前、明治の探検王・白瀬^{のぶ}轟^{こう}陸軍中尉が、日本人として初めて南極大陸に足跡を残しました

しかし、その白瀬中尉が^{こもちょう}挙母町（現在の豊田市）で亡くなったことを知る人は少ないかもしれません。日本人として偉業を成したにもかかわらず、世間から忘れ去られたような晩年だったためです。

豊田市近代の産業とくらし発見館では、平成24年1月18日（水）～3月25日（日）まで、企画展「白瀬^{のぶ}轟^{こう}～夢の南極大陸へ～」を開催しました。

平成15年10月～12月に豊田市郷土資料館において開催された特別展「白瀬中尉の南極探検」をご覧になった方もいらっしゃると思いますが、今回の企画展は、白瀬日本南極探検隊100周年記念プロジェクトの一環として、白瀬中尉の生涯と彼が率いた日本南極探検隊の偉業を50枚にもおよぶ展示タペストリーで紹介しました。

この記念プロジェクトは、昨年7月の石川^{はくい}県羽咋市からスタートし、全国7か所で巡回展示を行い、最後にこの豊田市で企画展を開催することとなったものです。また、今回は白瀬南極探検隊記念館（秋田県）や白瀬南極探検隊後援会にゆかりの村上正俊様をはじめ、多くの方のご協力により白瀬中尉に関連する資料も展示することができました。



今回の展示では、白瀬中尉が南極探検を成し遂げた後、どのような生活を送り、終焉地である^{しゅうえんち}挙母町へたどり着いたのかに注目して紹介しました。

明治45年（1912）1月28日午後0時20分、白瀬中尉は、南緯80度5分、西経156度37分の点に日章旗を立て、^{やまとゆきはら}辺り一帯を「大和雪原」と命名し、学術的にも大きな成果を残しました。しかし、帰国後は南極探検による多額の借金（約4万円。現在の物価に換算して

1億4千万円～2億円）の返済に苦しみ、知り合いを頼って北海道から熊本、そして朝鮮までも講演や映画会を開いて、各地をまわりました。

そして、最後に二女タケコの長男でトヨタ自動車に就職していた^{うしお}河口潮を頼り、京都・嵐山から昭和21年（1946）8月19日に転居して来たのが現在の豊田市神明町2丁目の、当時そこに在った^{うおじゅう}「魚十」分店、鈴木明治宅の2階でした。

白瀬中尉と妻やす、二女タケコとその長女喜子の4人が間借りしたのは、8畳と6畳の2間だけで、当時、軍人恩給も打ち切られており、苦しい生活でした。

栄養失調の状態であった白瀬中尉が、大家から米を分けてもらって、久しぶりに“真っ白いご飯”を腹いっぱい食べたためか、引っ越しから17日目の9月4日、腸閉塞のため急死し、満85歳の生涯を終えました。「我れ無くも 必ず捜せ南極の 地中の宝 世にいだすまで」と辞世の歌を残しています。

昭和54年（1979）3月15日、この「魚十」分店の跡地に、「白瀬中尉終焉の地」の石碑が建てられました。

この石碑の揮毫は第1次から第3次まで南極観測隊長を務めた、豊田市に縁のある、永田武氏によるものです。



白瀬中尉の死後、タケコら遺族は市内の東梅坪町の農家や宮町の浄覚寺などに転居した後、西林寺（西尾市）に落ち着きました。

白瀬中尉の不遇の後半生や、豊田市内のゆかりの場所など、この企画展を通して多くの方に関心を持っていただけたのではないかと思います。

（杉藤嘉洋）

トクさの龍・漆喰彫刻4態

はじめに

今回は民具報告からはなれて、市内各所に点在する資料館への移動や現地に通う行程の中で見つけた資料の紹介をさせて戴きます。「稲武郷土資料館・ちゅ〜ま」へは、国道153号線を足助から長野方面に向かいます。その道すがら明川の郵便局を右手に見て、少し進むとそれはありました。街道を行き来する人々を見逃さないようににらみをきかした龍の姿が〔写真-2〕。

4態の龍

明川の龍を、稲武へ通う日々に目にするうちにこれと似たものを何処かで見たぞ、という思いが高まりました。…それは、小原郷土館での調査を終え次の任地である、旭郷土資料館へ撮影の機材や資料などの大量の荷物と共に引越しをした時のことでした。小原の上仁木から岐阜の明智町へ抜ける道路を行き、阿妻に出るT字路の北側にあったものでした〔写真-1〕。

私を魅了したふたつの龍のことが頭から離れない。そんな日々の中で以前にもうひとつ似たものを目にした記憶がよみがえり、現地に出向き3つ目の龍を確認しました〔写真-3〕。その時、3態の龍は同一人物の手になる仕事ではないのだろうかという思いが強くなりました。3つ目のそれは、足助の千田町にありますので明川からは3km程しか離れていません。そこで千田町の蔵を所有されているお宅を訪ね、龍のお話を伺うとおばあちゃんが、「ダイジャのことかね？」と返され「小渡のシモギリだかカミギリだかのトクさという左官がこしらえた」とか「まわりの人が、明川のはこわいが、こっちは顔はやさしいと言う」などというお話をして下さった。

左官職人-上田徳弥

さて、手掛かりはひとつみつかりましたが、作者のことを調べる術がみつからない。そんな折り一緒に民具調査して下さっている人が小渡出身の方であったので、この話をしてみた所あっけなくトクさのご家族の事が判明しました。トクさと称されていた、龍の漆喰彫刻を造った人は、豊田市上切町大平岩（旧・恵那郡三濃村上切）在の上田徳弥（うえだとくやす）さんその人でした。そして幸いなことにトクさのお孫さんである、すぎおばあちゃんのご存命であり、トクさの人となりをお話して戴くことが出来ました。すぎさんに伺った事から推察してゆくと、トクさは天保14年頃の生まれで、80歳過ぎまで左官の仕事をされており、90

歳で亡くなられたそうです。「とうとう、自分のウチの蔵の仕上げをせずに…」「途中までやりかけで」、奥さんのなみさんと仲良く左官仕事をされていたと、すぎおばあちゃんがお話しして下さいました。

また前述の3つ以外にトクさの仕事は無いかと伺うと、矢作川沿いの小原の平畑にもあると教えて頂きました。後日、平畑町を訪れて探してみたが見つからない。矢作川の右岸の街道を行ったり来たりしたものの発見出来ませんでした。途方にくれて通りすがりの人に尋ねると、「ああ〜、黒い龍ネ。確か寿楽荘の上の方にあるよ」と教えて下さった。公園に車を止め、歩いて坂道を登って行くと姿が見え、嬉しさがこみ上げてきました。平畑の龍は在りました〔写真-4〕。ここでも、所有者のおばあちゃんにお話を伺う事ができ、「明川で仕事をやったけど、この辺りでもう一つやりたいので」とトクさが頼みにきたというお話でした。

蔵の龍

蔵の妻側に設けられた龍の漆喰彫刻とは。龍はインドや中国、日本では、雲を起し雨を呼ぶ強い霊力を持った存在として神格視され崇められてきましたので、火災から蔵を守ってもらうために取り付けられたものだと考えられています。家紋や雨の字をあしらったものは多々目にしますが、『火防の龍』のレリーフは大変珍しいと思います。さらに、漆喰彫刻としての仕上がりは、平面に少しの厚みを加えた通称『鏝絵』と称されるものとは比較にならない完成度をみせています。彫刻的にみても、円形の土台の中でうねる胴、威嚇するような口や眼、力強い三本指の手足など、ヒゲに針金が使われている事と、金色の眼の仕上げなど共通の処理部分が在りながら、4態とも異なる意匠であり、トクさの造形力と技術力の高さには驚かされます。



写真-1 岐阜県恵那市明智町阿妻



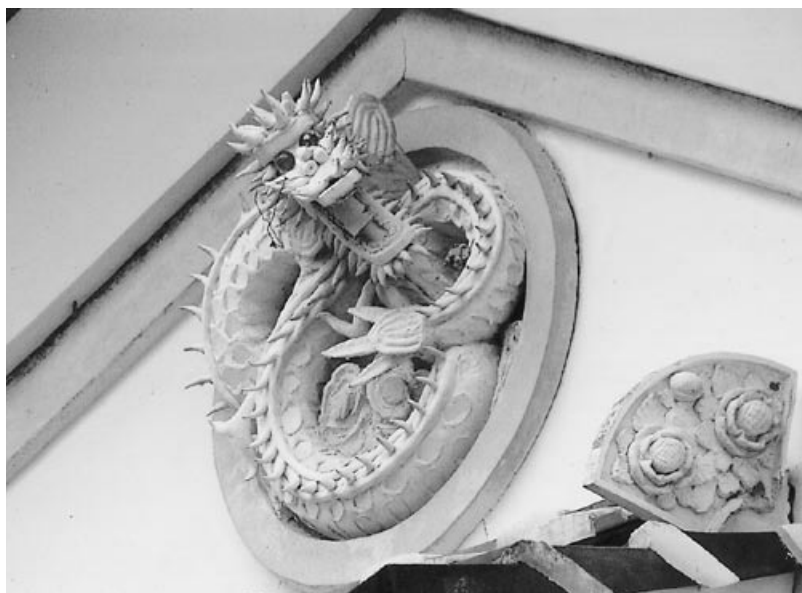
〔写真-2〕の蔵全景
明川の龍のみ眼の金色が失われています。
当主によると「昔、街道を通った馬稼ぎが
盗っていった」とのことでした。



〔写真-2〕 豊田市足助地区明川町の龍



〔写真-3〕の蔵全景
千田の蔵には小庇があり、そこに漆喰仕上げの扇面が取り付けられています。



〔写真-3〕 豊田市足助地区千田町の龍



〔写真-4〕の蔵全景
平畑の龍のみ他の仕事と異なり、龍以外が
黒色で仕上げられています。また残念な事
に下部の胴の部分欠落しています。



〔写真-4〕 豊田市小原地区平畑町の龍

恵まれた時代に生きるみなさんへ

戦争体験者(陸軍特別甲種幹部候補生)の話

—小原中部小学校との連携—

地域学習サポーターによる学習支援

昨年度から始まった藤岡地区の地域学習サポーター事業に続き、本年度は小原地区でも、10名の方にサポーター登録をしていただき、小学校の学習のお手伝いを始めています。

これまでに、6年生社会科で「縄文時代の小原」というテーマで本物の土器片や黒曜石を使った体験学習を行ったり、3・4年生の「古い道具と昔の暮らし」の学習で、今はあまり目にすることのなくなった古い農具や民具を使ってみたり、昔の小原の話を聞いたりする授業を行ってきました。

今回は、1月に小原中部小学校で行った戦争体験者のお話から学ぶ授業をご紹介します。

6年生総合的な学習の時間「戦争中の暮らし」

小原中部小学校では6年生の子どもたちが、それぞれ「集団疎開」「戦争中の食べ物」「衣服」とテーマを分担して戦争について学習を進めていました。しかし、本や写真だけでは分からないことも多く、自分の祖父^{おじ}母などに話を聞いても、戦後70年近くたっている今、戦争中についての疑問に答えられる人があまりいませんでした。そこで、今回小原地区サポーターの尾嶋^{おじま}美昭先生に当時の話をしていただき、戦争についてより深く考えることにしました。

(以下尾嶋先生の講話の要旨)

私は大正11年生まれの89歳。小原の上仁木で雑貨屋の末っ子として生まれた。旧制の中学校を卒業すると仲間の多くは、軍隊へ入り戦場に出かけた人も多かった。学校の先生になるために、名古屋第一師範学校へ進み、入隊が2年ほど遅れたが、「機甲訓練」という形で、物資の輸送など軍の仕事に協力させられた。当時すでに米軍による本土攻撃が始まっており、工場の疎開とともに児童の集団疎開も始まった。予定より半年も早く師範学校を卒業させられると、「陸軍特別甲種幹部候補生」として戦闘訓練を香川県豊浜町で行った。ここでの訓練は、小型の船に爆弾(水雷)を載せ、敵船近くで爆弾を投下し、戻ってくるというものだった。トヨタや日産の自動車エンジンを使用し、敵駆逐艦のスピードより遅いため、あくまでも上陸前の速度を緩めたときか、停泊しているときの奇襲作戦であった。船を少しでも軽くするために、積んでいるのは爆弾だけで機関銃などはなし。この戦法は、すべ

ての船が爆弾を落とすことを目標としておらず、半分か3分の1が相手の船に近づければよいという命がけの作戦だった。



私は、幸運にも戦地へ赴く直前に終戦を迎えられたが、ここで訓練を受け、戦闘に出かけた若者は、2288名、そのうち1636名が帰らぬ人となった。みな満15歳未満から20歳そこそこの若者ばかりだった。あと数日、戦争が長引いていたら、自分も生きていたかどうか分からない。

戦争は、絶対にしてはならない。同級生の男の半分以上はこの戦争で亡くなった。今は、いい時代。家にもテレビを通して世界中の出来事が分かり、食べる物に困ることもない。自分の意見や考えを自由に表現することができる。幸せのすばらしさを今の人たちは、しっかりと守っていった欲しい。

戦争の悲惨さを学ぶ

この他、引き上げの際に見た、空襲で焼け野原となった神戸の街の様子や家を失い名古屋駅で寝泊りする人々などの話に子どもたちは、興味深く耳を傾けていました。この学習後の子どもたちの感想からも戦争の悲惨さが伝わったことが感じられます。

略…尾嶋先生が体験されたお話を聞いていたら、とても心がはりさけるくらい悲しかったです。戦争でどれだけの人が亡くなっていったとか心が折れそうなお話で、戦争はあってはいけないことと思いました。尾嶋先生が最後におっしゃった言葉「戦争は、絶対にしてはいけない。」って聞いて(昔の話を聞く前に亡くなってしまった)私のひいおじいちゃんもきっと同じことを言ったんじゃないかと思います。

(杉本 満)

埋蔵文化財調査ニュース

○ 高橋遺跡（高上2丁目）

共同住宅の建替えに伴い約76㎡を発掘調査しました。今回の調査地点は、高橋遺跡のほぼ中央部に位置し、第2・4・9次調査区に近接しています。第2・4・9次調査では主に弥生～古墳時代の竪穴建物が多く見つかっています。そのため、今回の調査区でも竪穴建物が見つかるのではないかと考えられましたが、竪穴建物はなく、方形周溝墓（溝で四角形に区画した墳墓）と呼ばれる一辺約10mの墳墓1基が見つかりました。遺物は溝部分から弥生時代終末期の土器が出土しました。高橋遺跡では、方形周溝墓は今回の調査区の約200m南西の地区で5基と約400m北東の地区で26基見つかっています。今回の調査区の結果から新たな墓域が遺跡の中央部に分布することや中央部付近における遺跡の範囲がこれまでよりも西側にも広がる可能性があることが分かりました。



○ 寺部遺跡[11A・B区]（上野町1丁目・千石町）

寺部遺跡11A・B区は寺部土地区画整理事業に伴う調査で、11A区約4,000㎡・B区約3,000㎡です。

11A区は寺部遺跡の東端にあたり、平成24年1月に調査を完了し、古代の溝、中世の溝・井戸・掘立柱建物、近世の溝・水田などが見つかりました。

古代の溝は調査区の北西部から南東部にかけて見つかかり、須恵器・灰釉陶器などが出土し、数点の墨書土器もみられました。中世の溝は古代の溝と一部交差しありますが、ほぼ同じ位置にありました。山茶碗の碗や皿などが出土しました。

11B区は3月までの予定で調査を行っています。



寺部遺跡11A区 全景

○ 寺部遺跡[11C・D区]（上野町1丁目）

寺部遺跡11C・D区は学校等の移転予定の土地造成に伴う調査で、11C区約2,000㎡・D区約600㎡を調査しました。11C区は11A区の南に隣接した区画で寺部遺跡の南東端にあたります。調査区の東半部では隅丸方形や不定形の深さ10～20cmの土坑が多数見つかかりました。その多くが粘土質の土を掘り、後に周辺の土で埋められたような状況を呈していました。

このうちの土坑のひとつから皇朝十二銭と呼ばれている「^{まんねんつうほう}萬年通宝」が1点出土し、豊田市内で初めて古代の銭が見つかりました。



萬年通宝

11D区は08A区の南に位置し、08A区で見つかった縄文時代の自然流路の続きが見つかっています。08A区では多量の縄文土器が出土しましたが、今回の区画ではわずかでした。



寺部遺跡11C区

（杉浦 裕幸）

文化財シリーズ



市指定文化財

隣松寺本堂

今回の文化財シリーズは、平成24年3月に豊田市の有形文化財(建造物)として新たに指定となった隣松寺本堂を取り上げます。隣松寺は、平安時代の承和10年(843)に天台宗の寺院として現在の豊田市幸町に創建され、鎌倉時代の仁治元年(1240)に浄土宗に転じました。徳川家康との関係も深く、永禄6年(1563)に起きた三河国西部の一揆の際には隣松寺に本陣を置いています。現在も徳川家ゆかりの品が多数収蔵されています。

現在の本堂は、寛文年間(1661～1673)に起きた火災による焼失後直ちに再建されたもので、棟札により寛文7年(1667)の建立であることが知られます。浄土宗本堂としては県下で6番目に古く、市内においては最古の遺構です。

隣松寺本堂は、規模も大きく、古い形式をよく守っ

て建立されています。

また、寛政12年(1800)の改築に関する棟札も残されており、その際に、内陣と位牌の間の床を高くしたことなどが分かっています。この改築は、18世紀後半以降の当地方の浄土宗本堂の傾向と合致し、浄土宗本堂の発展・変遷過程を知る上で、指標となり得ます。当地方を代表する近世浄土宗本堂の貴重な遺構の一つです。



隣松寺本堂

資料館NEWS

1月から3月の中旬にかけて、昔の人が使っていた道具や暮らしについて学ぶため、市内の多くの小学生が郷土資料館へ見学に訪れました。

下駄を体験した子は、「昔の人はこんなに歩きにくいものを履いていたんだ。」と新たな発見をしていました。「この下駄を履いて走り回って遊んでいたんだよ。」と言うとさらに驚いていました。



また、陶枕という頭の熱を冷ましたり、血圧を下げる健康枕として使われていた陶器の枕があります。これを小学生に触らせて、何の道具だろうと問いかけると、固くて冷たいので、「貯金箱」や「ひじかけ」など様々な答えが出てきます。そこでこれが枕ということ教えると驚きの声上がり、我先にと体験する

姿が見られました。

約280年前の農家を移築して造られた民俗資料館では、厚い茅葺の屋根や見たことのない古い道具が並んでいるのに驚き、当時の人々がどのような生活をしていたのかという話に興味深く耳を傾けていました。人を乗せて運ぶ駕籠のうち、主に山道で用いられた「山駕籠」はみんなで取り合いになるくらいの人気です。

教科書やインターネットで見ていた道具を、実際に触って体験することで「意外と重い」「使うのが大変」など新たな発見が得られる機会になったのではないかと思います。

今後も小中学生がより多くの発見をし、より多くのことを感じられる資料館見学にしていきたいと考えています。



利用案内

開館時間 9:00～17:00

休館日 毎週月曜日(祝祭日は開館)

入場料 無料(特別展開催中は有料)

交通 名鉄「梅坪駅」より南へ 徒歩10分

名鉄「豊田市駅」より北へ 徒歩15分

愛知環状線「新豊田駅」より 徒歩15分

駐車場 約20台

■豊田市郷土資料館だより No.79■

平成24年3月30日発行

編集・発行 豊田市郷土資料館

〒471-0079 豊田市陣中町1-21

☎ (0565) 32-6561 FAX (0565) 34-0095

E-mail: rekihaku@city.toyota.aichi.jp

URL: <http://www.toyota-rekihaku.com>

※豊田市郷土資料館だよりはHPでもご覧になれます。